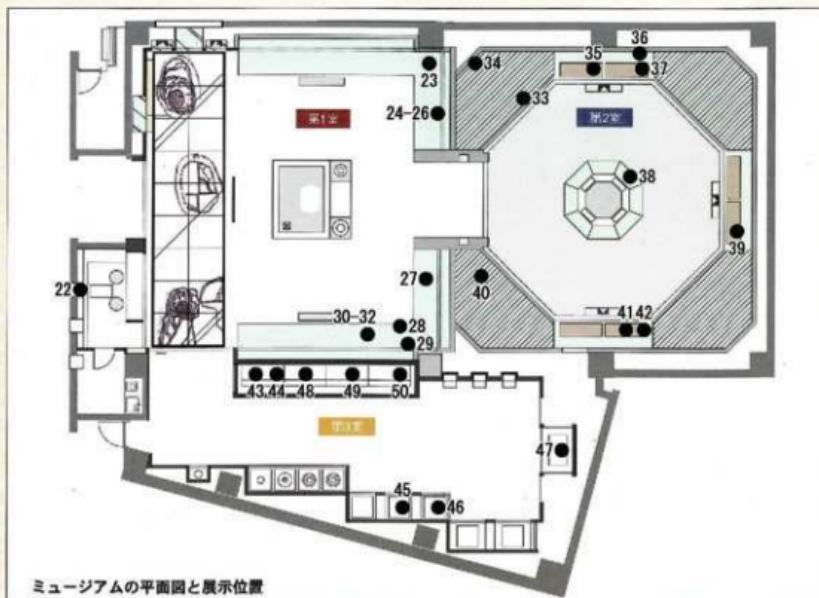


# 唐古・鍵考古学ミュージアム

## ミュージアムコレクション

Volume 2





ミュージアムの平面図と展示位置

## 目次

## Contents

◆第1室◆ 唐古・鏡の弥生世界	No 36 鰐齒文様で飾られた高杯.....(15)
No 22 弥生美を表現した水芭形土器.....(1)	No 37 ネズミの爪痕が残る弥生の壺.....(16)
No 23 鹿首刈りを示す埴立.....(2)	No 38 玉作りの道具 石鋸・玉砥石.....(17)
No 24 墓果類を粉砕した敲石.....(3)	No 39 板状の鉄矛.....(18)
No 25 投弾.....(4)	No 40 重張文様をもつ腰姿椎文銅舞鏃型.....(19)
No 26 手鏡.....(5)	No 41 スクラップにされた銅鏡片.....(20)
No 27 吉備から運ばれた大形器台.....(6)	No 42 シイ貝を模した巴形銅器.....(21)
No 28 箱に収められた石劍.....(7)	◆第3室◆ 田原本のあゆみ
No 29 儀礼に使われた木製盾.....(8)	No 43 多採集の有茎尖頭器.....(22)
No 30 繩文的色彩をもつ環状石斧.....(9)	No 44 粗製繩文土器は語る.....(23)
No 31 古いに使った骨.....(10)	No 45 馬を曳く人物埴輪.....(24)
No 32 木製の差し牙があるイノシシ下顎骨.....(11)	No 46 騙り馬の埴輪.....(25)
◆第2室◆ 唐古・鏡の弥生世界	No 47 百年以上前に見つかった牛形埴輪.....(26)
No 33 火を燃す道具 火鏡臼.....(12)	No 48 潤滑具の変革 壺.....(27)
No 34 赤塗りの壺.....(13)	No 49 平安時代の折.....(28)
No 35 土器作りに使われたタキ板.....(14)	No 50 民間信仰の瓦質壺.....(29)

## 例言 Explanatory Notes

- 本書は、「広報たわらもと」平成18年9月号（No 416）から平成21年1月号（No 444）に掲載した「ミュージアムコレクション」第22回から第50回をミュージアムの展示解説書「唐古・鏡考古学ミュージアム ミュージアムコレクション Volume 2」として編集したものである。
- 本書の本文・写真・図等は、当時のものを基本としたが、一部に表現・内容等改めた部分や写真・図の追加・差替えなどをおこない、補訂した。また、展示品解説の順序は、ミュージアムの展示順序に合わせたため、当初のNoとは異なり、「Volume 1」の続きのNoとした。
- 本書の作成に当たっては、奈良県立橿原考古学研究所・清水昭博・寺沢薰・東島沙弥佳・光石鴎巳の諸氏からご協力を賜った。記して感謝します。
- 本書の執筆・編集は、河森一浩・藤田三郎がおこない、西岡成見の協力を得た。

## Mizusashi-gata Dokki

Pitcher Decorated with Ryusui-Design



流水文部分

No.22

**弥生美を表現した  
水差形土器**

井戸の神様に供えられた土器

教科書や歴史一般書などでは、原始時代の土器として、縄目の残る文様や炎を立体的に表現したような縄文土器、櫛（箒状の茎を10本程度束ねた工具）描文様を施した弥生土器がよく紹介されています。黒褐色を呈したダイナミックな造形美をもつ狩猟民の縄文土器に対し、赤褐色を呈した素朴感のある農民の弥生土器は対照的です。

さて、今回は弥生土器のなかでも秀麗な一品として、特筆できる土器を紹介します。この土器は「水差形土器」と呼ばれるもので、唐古・雞遺跡の弥生時代中期の井戸から完全な形で出土しました。井戸からの出土品は完全な形のものが多いことから、井戸（水）の神様にお供えしたものだと考えられています。

紹介の水差形土器は、算盤玉のような胴部に直立する口縁部がついた壺の一種で、口縁部と胴部との界には把手が付けられています。把手に中指と薬指を入れ、口縁部を親指で押さえると、水をくったり注いだり

## ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代 中期

調 査：唐古・雞遺跡 第61次調査

発見年：1997年

大きさ：高さ13.4cm・胴部径14.0cm

展示位置：エントランス「小窓ケース1」

するのに適していることが分かります。また、把手と反対側になる胴部下半には水をくう時に擦れ磨耗した跡もみられ、まさに「水差し」としての機能をもっている土器と言えます。

この土器は、形態的な特徴だけでなく、胴部に描かれた櫛描きの籠状文や流水文もみごとな描き方をしています。頭胴部界には籠状文をめぐらし、その下に「工」字状を呈した流水文を三つ割付しています。また、流水文の余白部分には、「口」字状の長方形の櫛描文を充填することにより、流水文が土器全体にめぐっているように見せかけており、作者の心遣い配慮がうかがえます。

弥生時代の人が、水の流れを意識してこの文様を描いたとは考えられませんが、櫛状の工具を丁寧に回転させながら、土器に刻む行為には、唐古・雞人の「弥生の精神」を感じさせる一品と言えるでしょう。

古代のコメの収穫量<sup>(1)</sup>

田級/度量	玄米量	4斗俵	玄米重量
上田	9斗5升8合	約2.4	約120kg
中田	7斗6升6合	約1.9	約96kg
下田	5斗7升5合	約1.4	約72kg
下下田	2斗8升7合	約0.7	約36kg

(奈良・平安時代の文献に記された水田1反からの  
コメの収穫量を現在の斗量に換算)

No.23

## 穂首刈りを示す穂束

### 穂束が示す米の収穫量

#### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 前期

調査：唐古・鍵遺跡 第33次調査

発見年：1987年

大きさ：長さ9.0cm・繩縛径1.5cm

展示位置：第1室「弥生の食」

この資料は、唐古・鍵ムラの環濠が成立する以前の  
弥生時代前期、ムラ南端の低湿地から出土したもので  
す。穂束は、水分を含んだ緻密な粘土でパックされて  
いたことや炭化していたことが幸いして、当時の状況  
のまま残ったようです。1mmにも満たない穂の茎を何  
十本と束ね、稻わらでぐるぐる巻きにしっかりと縛っ  
ています。残念ながら、稻穂は残存していませんが、  
茎の太さから穂にちかい部分を縛って保管していたこ  
とが分かります。このことは、弥生時代の収穫が石庖  
丁による穂首刈りであったことを裏付ける資料として  
重要な価値をもちます。

弥生時代には冷害や虫害などの対策として複数品種  
の米を育いたとされ、穂の実る時期が一定しないため  
に、成熟した穂から順番に「穂摘み」したと考えられ  
ています。弥生時代後期以降、稻の品種改良に伴って、  
「根刈り」への転換が徐々に進んだと推定されます。

ところで唐古・鍵遺跡の第11次調査でも、稻の痕  
跡4cmを残す推定復元長20cmの穂束が出土しています。  
穂の部分は10cmほどあったと推定されていますから、  
現在の稲穂が30cm前後であることを考えると、かな  
り貧弱であることがわかります。また1株の米粒の数  
を比較すると、前者を930粒、後者を2400粒とする  
試算があり、弥生時代の収穫量は大変少なかったこと  
が想像されます。

米作りが始まった弥生時代から、現代と同じように  
稻穂の実る風景が広がっていたと思われがちですが、  
現在に比べるとお米の生産性は、かなり低かったと推  
定されます。

今回の資料は、一見、真っ黒な植物の茎の束ですが、  
稻の生産性や稻穂の管理の仕方、稻わらの利用など多  
くの視点を提供してくれます。

(1) 寺沢 葦著 2000年『王権誕生』講談社



弥生時代前期のドングリピット<sup>(2)</sup>  
(唐古・縫遺跡 第11次調査)

No.24

## 堅果類を粉碎した敲石

お米の補完食を裏付ける石の道具

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代 後期

調 査：唐古・縫遺跡 第69次調査

発見年：1998年

大きさ：長さ8.0cm・厚み4.9cm・重さ498.8g

展示位置：第1章「弥生の食」

弥生時代においても石は便利な調理具の一つです。今日はその調理具の一つである敲石を紹介します。敲石とは、円盤形や円筒形を呈す握り拳くらいのハンマーです。河原に落ちている手ごろな円錐や破損した太い枝や石斧などを利用しています。このような石の表面には、打撃の跡（敲打痕）がみられることから、石器製作に伴う粗削りや、トチノミ・コナラ・カシなどの堅果類を割る道具と考えられています。

今回の資料は安山岩製で、円盤形の中央部と周囲に敲打痕、平たい部分には摩滅痕がみられます。ドングリなどを石の周囲で打ち割った後、平たい部分で擦り、粉にしたと思われます。このような敲石には、セットとなる平たい大きめの台石があり、「円石・石皿」と呼ばれています。平坦面の中央は敲石の打撃と擦りによってくぼんでいます。

敲石は旧石器時代から出現し、縄文時代に増加し、

関東・中部高地から東海地方に分布の集中がみられます。当時の東日本には落葉広葉樹林が広がっており、主食としてトチノミ・コナラを利用したと思われます。こうした木の実の食用には灰汁抜きが必要で、煮沸の前処理として、敲石による粉碎がおこなわれたのでしょうか。一方、西日本に広がる照葉樹林では、灰汁抜きを必要としないシイ・カシが主で、東日本に比べて敲石・圓石・石皿の利用は少なかったとみられています。

弥生時代には、お米の収穫量が1年の1/3を満たす程度で、ドングリ類がお米を補完する重要な役割を果たしたとする説があります。唐古・縫遺跡でも堅果類が詰まった穴が見つかっており、水に晒して灰汁抜きをおこなったと考えられます。現代でも柿餅や柿の実せんべいなどさまざまな食品に堅果類が利用されており、縄文・弥生の食文化の伝統を知ることができます。

(2) 稲原考古学研究所編 1981年『唐古・縫遺跡第10・11次発掘調査概報』



穴からまとめて出土した投弾  
(唐古・縄造跡 第20次調査)

## No.25 投 弾

武器になった円礫？

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 前・中期

調査：唐古・縄造跡 第89次調査 (右上：石弾)

第20次調査 (右下：土弾)

発見年：石弾 2002年・土弾 1985年

大きさ：石弾 長さ4.2cm・重さ55.7g

土弾 長さ5.3cm・重さ28.2g

展示位置：第1室「弥生の食」

今回は、武器や狩猟具と考えられる「投弾」を紹介します。写真上段の球形は石製、下段の紡錘形は土製の「投弾」で、前者は「石弾」、後者は「土弾」とも呼ばれています。このような「石弾」には、直径4～5cm、重さ65g前後の自然の円礫が多く使われました。

日本では、「投弾」の使用法を示す出土例はありますかが、ヨーロッパでは投弾帯とセットで使われたとされています。投弾帯とは、「投弾」を包んだ袋の両端に、1m前後の毛糸や皮革、植物繊維製の紐を取り付けたもので、腕で投弾帯をグルグルと回し、遠心力を利用して「投弾」を投げたと考えられています。

弓矢の射程距離が90～170mであるのに対し、「投弾」は200m先の標的に命中させることも可能でした。また弓矢に比べ準備も簡単で、天候の影響を受けないところから、騎馬戦が出現する以前には武器として発達しました。

一方、東アジアでは投弾帯の存在は不明です。日本

や中国、朝鮮では、合戦を模して石(飛鏢)を投げ合う「石合戦」と呼ばれる習俗が知られ、素手で「投弾」を投げ合う形が、一般的と考えられます。ただし、スウェーデン民族博物館には北朝鮮北西部で採集された投弾帯が所蔵され、かつて東アジアにも投弾帯が分布した可能性を示しています。

弥生時代の「石弾」は、防御性が指摘される高地性集落で出土する事例が注目され、武器の可能性が指摘されています。一方、紡錘形の「土弾」は、狩猟具として使われたとされています。九州西北部では弥生時代前期にあり、九州から近畿への弥生文化の波及を示す資料になります。

ただし、中国・朝鮮半島では「投弾」について明らかでなく、その起源をめぐっては検討課題を残しています。形態が単純な資料なだけに、その位置づけに関しては問題が山積みです。



No.26  
手 網

水田と密接な関係がある漁労具



井戸からまとめて出土した手網枠  
(唐古・鍵遺跡 第19次調査)

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 後期

調査：唐古・鍵遺跡 第19次調査

発見年：1984年

大きさ：長さ45.2cm・幅14.6cm

展示位置：第1室「弥生の食」

田に水が引かれる頃になると、水田や水路には魚が泳ぎ、手網などでこれを持捕えた経験をもつ人も多いでしょう。

この資料は、左右に広がる枝木を曲げ手網枠とし、網を装着したと考えられる漁労具です。網部分が残ることは希ですが、唐古・鍵遺跡第22次調査では炭化した麻製の網の結び目と考えられるものが出土しています。

現在の手網は、針金を円形に形作る一体型ですが、弥生時代は2本の小枝を巧みに利用して手網枠を作っています。ただし、基本的な形態が単純なことから、手網の形は約2000年間、ほとんど変化していません。

日本列島では、縄文時代から漁労が盛んになったと考えられ、海岸部では捕獲した貝類を多量に廃棄した貝塚が残されています。また、貝塚から出土する魚骨や、漁労具から当時の漁法が復元され、石製の鍬を用いた網漁や、釣り針・ヤス・モリを用いた近海漁業が中心だったとされています。

このような縄文時代の手法に対し、今回の手網や水中に籠を沈めて魚を捕る筌は、弥生時代から出現した漁労具で、縄文時代とは異なる漁労技術と考えられます。唐古・鍵遺跡では、コイ・フナやウナギといった魚の骨が出土しており、内陸部での漁労にこうした道具が使われたようです。

弥生時代は、大陸から稻作が伝わった時代とされ、これまで漁労の問題が注目されることはありませんでした。しかし、近年、水田や水路・環濠の出現が、新たな漁場を生み出したと考える説も出され、こうした場所での魚とりが、貴重なタンパク源になったと評価されています。水田の造営は、森林の開拓に伴い環境を破壊した側面もありますが、同時にムラの周辺には広大な水城が出現し、魚の寄り付く豊かな環境を生み出しました。水を湛える水田にも、弥生時代以来の智慧が凝縮されており、日本の原風景の一つとして長く残していきたいものです。



連続渦文部分

No.27

## 吉備から運ばれた 大形器台

吉備地域との密接な関係を示す器台

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 後期

調査：唐古・鍵遺跡 第51次調査

発見年：1993年

大きさ：高さ73.4cm・口径39.6cm

展示位置：第1室「交流と戦い」

唐古・鍵遺跡からは、さまざまな地域から運ばれてきた文物が出土します。今回は、吉備（現在の岡山県中・西部）地域から運ばれてきた大形器台を紹介しましょう。

器台は、壺を載せる円筒状の台として発達したもので、弥生時代中期から古墳時代にかけて西日本で多く作られました。

この器台は、高さ約73cmもある数少ない大形品で、円筒部中央がやや縮まった形態です。円筒部には5段構成の多条の凹線文がめぐらされ、その間には長方形の透かしがあけられています。また、大きく外反した口縁部には、3重の竹管文と斜線で構成された連続渦文がめぐらされています。このような特徴をもつ器台は、吉備を中心とする地域にみられます。

また、土器の胎土（粘土）は、この地域の特徴を示す灰白色を呈しており、吉備周辺で作られたことを示しています。

土器が運ばれる原因には、「移住に伴って運ばれた場合」や「特別な祭事に送られた場合」、「土器そのものが商品として流通した場合」、「内容物が運ばれた結果としての土器」などさまざまなことが想定されます。

今回の土器は、重さが9.5kgもある大形品で、壺などを載せる特別な器台であることや、ト骨や盾とともに井戸から出土したことから、マツリの場に供されたことが想定でき、「特別な祭事に送られた」可能性が考えられるでしょう。

ところで吉備地域では、弥生時代の終わりごろ、首長の墓にお供えする大形の特殊器台が出現し、埴輪の原型になったとされています。唐古・鍵遺跡の大形器台は、これより200年ほど前の後期初頭のもので直接関係はないですが、ヤマト王権成立前史の吉備地域との関係を考えるうえでは、重要な土器の一つになるでしょう。

## Sayairi Sekken

Stone Dagger with Wooden Sheath



鞘に収められた状態の石剣

No.28

## 鞘に収められた石剣

接近戦で使われた武器

## ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鐵遺跡 第13次調査

発見年：1982年

大きさ：剣 長さ16.8cm・幅3.1cm

鞘 長さ14.6cm・厚さ2.5cm

展示位置：第1室「交流と戦い」

剣は中国で発達した武器の一つで、春秋・戦国時代から漢代には、銅剣や鉄剣が使われました。また、中国東北部や朝鮮半島でも独自の銅剣・石剣が作られ、これらを模倣して日本の石剣が作られたとされています。

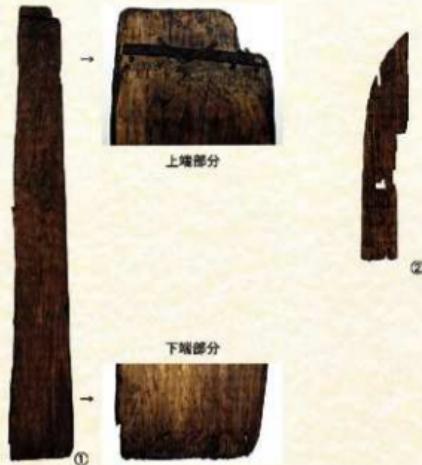
今回の鞘に収められた石剣は、サヌカイト製の打製石剣ですが、精巧な作りの一品です。剣の先端から中央の刃部は、両面から交互に小さく打ち割り鋸歯状に作り出し、鋭い刃部になっています。それに対し、基部から中央は刃渡しされ、中程にはサクラの樹皮が巻かれています。このことから、剣の刃と握りの部分を意識的に製作したものであることがわかります。

さらに注目されるのは、この石剣がヒノキ製の鞘に入れられていたことです。鞘は、浅いU字形に加工した白木の板材を2枚組み合わせ、両端をサクラの樹皮

で縛り固定しています。また、鞘の片面には、0.5cmほどの小孔が2つあけられており、紐を通し垂下していたと考えられます。この紐通孔は斜めの位置にあり、右利きの人物が左の腰に鞘を装着したと想定されます。

これまで打製石剣は、「石槍」と呼ばれることがあります。その位置づけは一定しませんでした。しかし、この資料は全国的に例のない鞘入りで、短剣であることを証明する資料となりました。また、鞘に収められていることにより、腰に佩用していたこともわかりました。

このような打製石剣は、弥生時代中期に大型化した石剣とともに、戦争や争乱の発生を示す資料として注目されています。こうした想定が正しければ、打製石剣は接近戦用の刺突具と位置づけられ、激しい戦闘のシーケンスを彷彿とさせます。



土器に描かれた盾と戈を持つ人物  
(清水風遺跡 第2次調査)

No.29

## 儀礼に使われた木製盾

絵画土器から想定される盾の用途

『魏志』倭人伝には、「兵には矛櫛木弓を用いる」とあり、当時の武器として矛や盾（櫛）が使われていたことがわかります。矛や劍は人を殺傷する攻撃用の武器、盾は身を守る防護用の武具で、いずれも弥生時代に登場しました。この時代の盾は一枚板で作られ、長方形を呈する形のものと盾の上部が円弧になる一群があります。

さて、唐古・鍵遺跡の盾は、いずれも軽量で柔らかいモミ属の板で作られています。写真①の盾は、縦半分に割れていますが、上下両端が残っており、その端部には補強材の横木が桟の皮で留められています。

盾には置いて使う「置楯」と持てて使う「持楯」の二種類があり、この資料は補強材の存在から、「置楯」と推定できそうです。

一方、写真②の盾は、下半部も欠けていることから全体の長さは不明で、「置楯」か「持楯」かは、わかり

### ◆コレクション・データ◆

【写真①】時 代：弥生時代 中期

調 査：唐古・鍵遺跡 第61次調査

発見年：1996年

大きさ：高さ114.9cm・厚さ1.2cm

【写真②】時 代：弥生時代 後期

調 査：唐古・鍵遺跡 第51次調査

発見年：1993年

大きさ：残存高57.1cm・厚さ1.0cm

展示位置：第1室「交流と戦い」

ません。ただし、盾の全面には横方向に平行する小孔があげられており、紐を通した孔と考えられています。衝撃で盾が木目沿って割れるのを防ぐためのものでしょう。また、所々に赤色顔料が残っていることから、元は真っ赤に飾られた盾だったと思われます。

岡山県南方遺跡では、石鎚が刺された木製盾が出土し、実戦用の武具であることがわかりました。しかし、弥生時代の木製盾には赤塗りや装飾のある例が多く、「儀礼用の盾」も考える必要があるでしょう。

こうした問題を考えるうえで、土器に線刻された「盾と戈を持つ人物」の絵画が注目されます（写真右）。清水風遺跡出土の絵画には、長方形と楕円形の盾が描かれ、唐古・鍵遺跡で出土した盾の形態と対応します。この絵画は、祭儀である模擬戦を表現したと考えられ、盾の用途を考えるうえで重要な示唆を与えてくれます。

## Kanjō Sekifu

Discoidal Stone Axe



多頭石斧

(唐古・鍵遺跡 第53次調査)

No.30

縄文的色彩をもつ  
環状石斧

東日本との関係を示す特殊な遺物

この資料は、「環状石斧」と呼ばれる石器です。円盤状の中心部に円孔をもつ磨製石器で、周縁部は研磨され鋭く刃部が付けられています。ほぼ半分に割れていますが、中央の円孔は孔径にあった円柱状の石錐によって両面からあけられています。

中央の円孔に棍棒を通して、使用したと考えられます。が、具体的な用途に関しては、東南アジアの民俗例から武器説、権力者の儀仗説や土振り用の農具説とさまざままで決着していません。

このような環状石斧は、約8000年前の縄文時代早期に北海道・東北北部・九州で出現しますが、その後は縄文時代晩期には中部高地や飛騨地域に分布します。また、弥生時代中期や中国東北部や朝鮮半島にもあります。その系譜的な関係はわかっていないません。

唐古・鍵遺跡の環状石斧は、円孔の周辺に漆が残ることから、実用より装飾的な遺物と思われます。祭祀用

## ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 前期

調査：唐古・鍵遺跡 第53次調査

発見年：1993年

大きさ：直径12.8cm・厚さ1.5cm

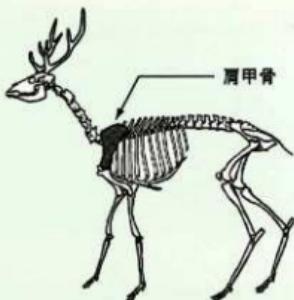
展示位置：第1章「交流と戦い」

の儀仗として使われたのかもしれません。唐古・鍵遺跡ではこの環状石斧以外に、周縁部に切込みがある花弁形をした多頭石斧（写真右）も出土しています。これら唐古・鍵遺跡の石器は、弥生時代前期のもので、時期的・形態的に縄文時代晩期の中部高地や飛騨地域のものにちかいものです。

このことは、唐古・鍵遺跡の環状石斧がそれら地域からもたらされた、あるいは影響を受けた遺物とみなすことができるでしょう。

縄文時代後・晩期には、気候の寒冷化に伴い、東日本の縄文文化が近畿から九州に及びます。また、地理的には唐古・鍵遺跡は、西日本と東日本の接点にあたりています。

今回の環状石斧は、縄文文化との繋がりや地域的な影響を示している遺物で、唐古・鍵遺跡に内在する弥生の基層文化を考える上で貴重な資料になります。



鹿の骨格図

No.31-

## 占いに使った骨

魏志倭人伝の記述を証明するト骨

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第37次調査

発見年：1989年

大きさ：長さ18.6cm・幅11.2cm

展示位置：第1室「いのりとまつり」

人はいつの時代にも迷い、「カミ」のお告げを期待し、祈るものであります。時代が遡れば遡るほどその傾向は強くなるでしょう。占うという風習は、すでに弥生時代にも存在していました。それは占いに使われた「ト骨」と呼ばれる骨が西日本で多く出土していることからわかります。

ト骨とは、鹿やイノシシの肩甲骨などの表面に黒く焦げた焼灼痕があるもので、これは先端が焼けている棒を押し当て、生じたひび割れや焦げ具合によって吉凶を占った結果だと推定されています。

このト骨は鹿の肩甲骨（右図）を用いたもので、平坦な内面側から焼いています。骨の一番薄い部分に縦方向7ヶ所、黒く焦げた焼灼痕が点状にあります。唐古・鍵遺跡では、焼灼する位置は時期によって異なり、これより古い時期のト骨は細く厚い基部に施しています。

さて、ト骨の風習は、中国や朝鮮半島など東アジアで広くみられます。中国の殷王朝期には、亀甲を使っ

た亀トが特徴的で、占いの日付や内容を線刻した甲骨文字がみられます。甲骨文字の分析によると、祖先や自然神への祭祀、戦争、狩猟の可否に関連する内容が多く、風雨や年ごとの豊凶を占ったものもみられます。

今回のト骨は、井戸に意識的に投棄されたもので、このほかに壺や高杯、タヌキの頭骨、アカニシなどがありました。これらは占いの場に供えられていた品物かもしれません。このような例は唐古・鍵遺跡第20次調査にもありますが、大半は特別な出土状況を示すものではなく、溝や穴にゴミとして捨てられていました。

『魏志』倭人伝には、「骨を灼いてトし、以て吉凶を占う」とありますが、弥生時代のト骨に甲骨文字はみられず、占いの具体的な内容は不明です。唐古・鍵遺跡では盛んに占いをしていましたが、何を占い、その結果がどうであったのか、残念ながら知る手がかりはありません。

## Inoshishi Kagakkotsu

Mandible bone of wild Boar



環濠に棄てられたイノシシ下顎の集積  
(唐古・鍵遺跡 第13次調査)

No.32

## 木製の差し歯がある イノシシ下顎骨

記念品? 儀礼用? 特別な扱いを受けたイノシシ

2007年は「亥年」。この干支にちなんでイノシシに関する資料を紹介します。

この資料は、牡のイノシシ老獣の下顎骨です。二股に分かれた下顎の両側には径3cmほどの穴があけられ、2本の歯は腕輪にするためか抜き取られ、代わりに木製の歯が差し込まれているものです。捕獲したイノシシの強暴さを見せるためにわざわざ木製の差し歯をこしらえたのでしょうか、他に例のない資料です。

イノシシの下顎に穴をあける例は、唐古・鍵遺跡でも十数例あり、西日本の弥生遺跡でも確認されています。なかでも岡山県南方遺跡では、下顎の穴に棒を通して12個連ねた状態のものが出土しています。また、唐古・鍵遺跡では、穴をあけずに14個のイノシシ下顎を棒に引っ掛けた状態のものや7個体分の下顎を集積したもの(写真右)が見つかっています。

このようなことから、弥生時代には捕獲したイノシ

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 前期

調査：唐古・鍵遺跡 第37次調査

発見年：1989年

大きさ：長さ31.5cm・幅16.8cm・高さ12.6cm

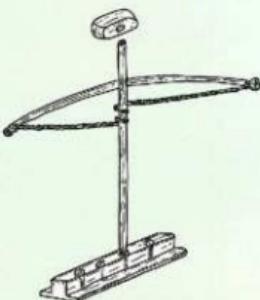
展示位置：第1室「いのりとまつり」

シの下顎を吊す、あるいは棒に架ける風習があったことがわかります。

家の鶴居に下顎を架ける例は、熊本県五家荘村やインドネシア・スンバ島など民俗・民族例にあり、狩猟の記念品的な意味合いがあったといわれています。このような例に相応するように、弥生遺跡出土の穴を開いたイノシシ下顎は牡の成獣が多いのです。

一方、穴を開けず集積した下顎などは、牝の若獣が使われている例があります。これはイノシシの多産にあやかり、豊作・豊獣の儀礼に使われたという考え方もあります。また、下顎が鉤状を呈していることから、「魔除け」的なものという意見もあります。

いずれにしてもイノシシは食用というだけでなく、弥生の人々の精神的な部分まで深く関わる動物だったといえるでしょう。



火の燃し方想定 1例

No.33

## 火を熾す道具 火鑽臼

神聖な儀式に使われた道具

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第13次調査

発見年：1982年

大きさ：長さ7.2cm・幅3.9cm

展示位置：第2室「弥生の住まい」

人類による火の利用は、約40万年前の旧石器時代に始まったと考えられています。当初は、火山や山火事などの火を利用したとされていますが、発火具の開発によって火の管理が可能となりました。以来、人類にとって火は日常生活に欠かせないものとなる一方、火を神聖なマツリの場に取り入れることになりました。

さて、日本では縄文時代から発火具が出土していますが、今回は唐古・鍵遺跡から出土した2000年前の火鑽臼を紹介します。

この資料はヤマグワの材を用いたもので、断面凸状に加工した板です。凸部の上面が4ヶ所丸く炭化して凹んでいます。また、この丸く凹んだ側面には縦に細く溝が彫られ、火の粉が下の台部に落ちるようになっています。

ところで火の熾し方には、火打ち石による衝撃法、凸形レンズから火を取る光学法、火鑽臼による摩擦法があります。この摩擦法には、人の手で発火棒（火鑽作）を揉む揉撚法、発火棒に紐を巻き付け回転させる紐撚

法、さらにそれに弓を利用して回転させる弓鑽法（右図）、発火棒に「はずみ車」を付け横木を上下させて回転させる舞鑽法の4種があります。

唐古・鍵遺跡では、発火棒と断定できるものではなく、揉撚法か舞鑽法かを判別することはできません。登呂遺跡では弓と考えられる木製品が出土しており、弥生時代から舞鑽法が存在したことは確かです。出雲大社（島根県）や弥彦神社（新潟県）では、新嘗祭や国造の交替式の神事に際し、揉撚法で火を熾していました。また、伊勢神宮では神饌を炊く火を熾すのに舞鑽法が用いられており、摩擦法による発火には、神事との深い関連が認められます。

この火鑽臼は、箕や丹塗り盾、甕など祭祀的な遺物とともに環濠に投棄された状態で出土しています。これらの遺物から火鑽臼によって熾した「火」が重要な役割を果たしていたことが想定できるとともに、弥生の人たちの「火」を神聖視する姿が読み取れます。

Pot Colored with Red

井戸から一括出土した土器  
(唐古・鍵遺跡 第5次調査)

No.34

## 赤塗りの壺

祭祀用の特別な土器の出現

## ◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代 前期

調査：唐古・鍵遺跡 第5次調査

発見年：1978年

大きさ：高さ28.5cm・口径15.1cm・脚径24.7cm

展示位置：第2室「弥生の住まい」

唐古・鍵遺跡は、弥生時代の環濠集落として有名ですが、古墳時代まで集落は継続します。特に、古墳時代前期には弥生時代の環濠を再掘削し、再びムラを開むことになります。今回は、この古墳時代前期の集落に伴う井戸から出土した壺を紹介します。

この壺は、球形の胴部に短く外反する口縁部がつくるもので、考古学では「直口壺」と呼んでいます。土器の表面には、赤色顔料が全面に厚く塗られ、底部には人為的にあけられた小さな穴があります。

この井戸からは、これ以外にも人為的に口縁部を打ち欠いた赤塗りの壺、甕や田舟が出土しています（写真右）。このような壺の底部を穿孔したり、口縁部を打ち欠いたりする行為は、弥生時代からみられ、「仮器」としての祭祀的な意味があったと考えられています。このような土器は、墓や井戸への供獻用土器として使われたもので、今回の土器もまさに井戸祭祀に利用されたものでしょう。

ところで、土器を赤く塗る風習は、弥生時代中期の

北部九州にみられ、全面を赤く塗った壺・器台・高杯などを、甕棺墓に伴う祭祀穴に供獻しています。また、弥生時代後期から終末期の東海でも、壺や器台・高杯・鉢などに赤塗りをした土器が知られ、「パレス・スタイル（宮廷様式）」として有名です。

しかし、弥生時代の近畿では土器を赤塗りする風習はみられず、日常で使用した土器を人為的に穿孔して、祭祀用土器に転用するケースがほとんどです。民俗学では、日常の生活を「ケ」、節目に当る祭日を「ハレ」と呼びますが、弥生時代における土器祭祀は、「ハレ」と「ケ」が未分化な状態とみることができます。

これに対し、古墳時代に出現する赤塗りの壺は、祭祀専用の土器として新たに創出されたもので、「ハレ」の土器として特化したものと考えられます。その系譜をめぐっては、不明な点も多いですが、古墳時代における新たな祭祀形態の成立を考えるうえでも、注目される資料でしょう。



タタキ痕のある器  
(唐古・鍵遺跡 第69次調査)

No.35

## 土器作りに使われたタタキ板

出土例が少ない土器作りの必需品

素材が何であれ私たちの日常生活において、容器は欠かせないものの一つです。特に弥生時代では、素焼きの容器（弥生土器）がたくさん作られました。日本の歴史上で弥生土器の生産量は、最も多い土器の一つでしょう。今回はそんな土器作りに使われた「タタキ板」と呼ばれる道具を紹介します。

この道具は、弥生時代のものとしてほんの数例しかありませんが、板材の一端を細く棒状にして把手とし、羽子板状に仕上げています。この把手を握り、上半部の平坦面で土器の外面を叩き絞めます。弥生土器は、紐状にした粘土を積み上げ成形する輪積み法によって作られています。タタキ板は、その粘土紐を密着させ、土器の表面を叩き締めることで凹凸をなくし、形を整えることができる優れた土器作りの道具です。実際に弥生土器の外には、平行する3mm前後の凹凸が規則正しくついているものが多くあります。これはタタキ板の文様が土器にスタンプされたもので、弥生時代中

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 後期

調査：唐古・鍵遺跡 第48次調査

発見年：1992年

大きさ：長さ30.6cm・幅5.4cm

展示位置：第2室「土器をつくる」

期頃から一般的になり、後期以降はさまざまな土器にみられるようになります（写真右）。これは後期の土器作りが簡素化したため、タタキ板の痕跡が消されずにそのまま残っているからです。

唐古・鍵遺跡のタタキ板はヤマグワ製で、上半部には平行する線条の凹凸がありますが、これは板に平行線を刻んだのか、あるいはこれを使い込むうちに木目が浮き出てきたものなのか、残念ながら使い込まれているため区別はつきません。ただし、これでつけられた文様は、弥生時代後期の土器にみられる一般的なタタキ文様になります。

土器作りを民族学的にみれば、タタキ板を用いない手法もありさまざまです。しかし、日本における多量の弥生土器のタタキ痕跡は、タタキ板が土器作りに欠かせない道具であったことを示しており、希少な唐古・鍵遺跡例がそれを証明しているのです。

## Pedestaled Dish Decorated with Kyoshi-Design



锯齿文部分

No.36  
鋸歯文様で飾られた高坏

辟邪の意味をもつ鋸歯文

## ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第13次調査

発見年：1982年

大きさ：脚部径18.0cm・残存高14.8cm

展示位置：第2室「土器をつくる」

人類は、身の回りにあるさまざまな器物に飾りつけをしました。それは文様（考古学では模様とせずに文様と呼ぶ）であったり、絵画や記号であったりします。このような行為は、現代まで營々とながるものです。

さて、今回は弥生土器に線刻された鋸歯文様を紹介します。この文様は、現代でも建物や容器などさまざまなものにみられる普遍的な文様です。

この資料は、高坏と呼ばれる土器の脚部で、本来は上部に鉢部が付き、食べ物などを盛り付ける器です。脚部には、斜格文・鋸歯文・刺突文の三種の文様が帶状にめぐらされています（写真右）。鋸歯文は、三角形の内部を斜めの格子目で充填し、連続的に連ねたもので弥生時代の鋸歯文の特徴を表しています。また、弥生時代の鋸歯文は、器物の内側（中心部）方向に描かれ、古墳時代以降のものとは対になるのも特徴です。このような文様を描く土器は、高坏や器台などお供え用の土器で、マツリ用の「ハレ」の器と考えられます。

ところで、この鋸歯文の三角文様は、鱗の形を連想させ、魔除け的な意味があるとされています。福岡県宗像を拠点とする水人は、胸に鱗（三角）形の入れ墨をして、鮫などの害を避けたと伝えられます。ちなみに田原本の領主・平野氏の家紋は、三角形を3つ重ねた「三鱗纹」と呼ばれるものです。また、古墳時代の盾形埴輪にも鋸歯文が多用され、盾といった防御具に描かれていることから、身を守る辟邪文としての意味が考えられます。

現在、抽象的な文様は、装飾を目的とする例が多く、特別な意味をもたないと考えがちです。しかし、ブエプロ・ズニ族（アメリカ）など身の回りの文様に意味をもたせる民族もみられ、記号や文字と同様の機能を果たしていた可能性もあります。

今では完全に忘れ去られ、変容してしまっている文様ですが、弥生時代の文様にも意味が込められていた可能性があり、その解説は弥生時代の精神世界を知るうえで重要なテーマの一つです。



壺(左)内部から見つかったハタネズミの全身骨(右)  
(唐古・鍵遺跡 第23次調査)

No.37

## ネズミの爪痕が残る 弥生の壺

ネズミと人との関わりを示す土器

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第33次調査

発見年：1988年

大きさ：残存高37.8cm

展示位置：第2室「土器をつくる」

2008年は「ネズミ（子）年」ということで、ネズミの爪痕が残る土器を紹介します。

この土器は、口縁部をわずかに欠く壺で、胴部上半には櫛状の工具による端整な直線文と波状文が描かれています。注目されるのは、この文様部分につけられた縦方向4本一単位の弧状に向かい合うような細線です。この細線をよく観察すると、細線の始まる部分が小さな丸い穴でそこから細い線が流れ、左右対称になっています。このことから、この細線は文様ではなく、動物の爪痕で爪の本数や大きさなどからネズミによるものと推定されます。

この爪痕は土器を焼く前につけられていることから、土器製作後、納屋などで乾燥期間中の出来事と考えられます。おそらく、食べ物を盛ろうと壺によじ登ったネズミが、途中で力尽きずり落ちたのでしょうか。

ところでネズミは、「住家性」の哺乳類と位置づけられ、人が住む所に現れ、人の食料をなんでも食べる

動物とされていますが、日本列島におけるネズミの出現時期についてはよくわかっていないません。

唐古・鍵遺跡では爪痕の残る土器だけでなく、ハタネズミ・アカネズミ・クマネズミ・ドブネズミの骨も出土しています（写真右）。このことから、少なくとも弥生時代前期からネズミがいたことは確かです。

これらのネズミは生息場所が異なり、クマネズミは乾燥した高所、ドブネズミは湿った場所、ハタネズミは草むらを好む傾向があります。このことから遺跡から出土したネズミの骨は、当時のムラの環境を復元するうえで重要になります。なかでもクマネズミやドブネズミの存在は、唐古・鍵ムラが都市的な様相を有していた可能性を示しています。

現在でもネズミの駆除は、頭を悩ます問題ですが、こうしたネズミとの関わりは、お米作りの始まった弥生時代からかもしれません。

## Beads-Making Ornaments



①石鋸 ②玉砥石 ③管玉未成品 ④碧玉の破片



②の玉砥石の断面

No.38

## 玉作りの道具 石鋸・玉砥石

唐古・鍵遺跡で作られた玉は?

ヒスイをはじめとする玉類は、弥生時代には貴重な宝石であり威信財として、また、辟邪的な意味を有する装身具として使われました。今回は、こうした玉類を作る道具を紹介します。

玉類の製作にはさまざまな道具が必要ですが、唐古・鍵遺跡からは、「石鋸」<sup>いしのこ</sup>や玉を磨く砥石などが出土しています。石鋸（写真①）は、紀ノ川流域で産する紅礫片岩が使われています。薄く剥離した長方形の石片を鋸のよう前後に動かし、玉材を擦り切り分割します。一方、玉を磨く砥石（写真②）は、砂質ホルンフェルス製で、表面にはU字形の3条の溝が残っています。成形された玉を磨き、形を整えるのに使ったのでしょうか。

また、勾玉や管玉には、縫を通す小孔がみられます。特に管玉は、両端から直徑1mmほどの小さな孔があけられています。この孔は、石製の鍬など回転させたと推定されていますが、その作業では玉が割れ

## ◆コレクション・データ◆ (②玉砥石)

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第13次調査

発見年：1982年

大きさ：残存長7.6cm・幅5.7cm

展示位置：第2室「玉を磨く」

やすく、玉の穿孔技術は今も謎に包まれています。さて、唐古・鍵遺跡では、製作途中の管玉（写真③）や、管玉に使われた碧玉の破片（写真④）が出土しています。玉の素材を唐古・鍵ムラに持ち込んで、管玉の製作をしていましたことを示しています。遠隔地の石川県や島根県で採取されたものが運び込まれた可能性が高く、当時の交易や交流を考えるうえでも注目されます。一方、唐古・鍵遺跡では、新潟県糸魚川産ヒスイで作られた勾玉や、丹後産？水晶で作られた丸玉の完成品が出土しています。これらは素材が運ばれてきたのではなく、完成品がこの地に運ばれてきた可能性が高いものです。こうした違いは、石材種の違いや製品の流通経路など玉作り集団が関わるさまざまな要因に左右されたと想定されます。

このように唐古・鍵遺跡で産しない貴重な玉の原石は、玉作り道具と石材の視点から各地との関係や玉の価値がそこに垣間見えます。



実験でおこなった鉄斧（左）と  
石斧（右）の削りくず

## No.39 板状の鉄斧

数少ない鉄器の存在は何を語るのか

### ◆コレクション・データ◆

時 代：弥生時代 後期

調 査：唐古・鍵遺跡 第40次調査

発見年：1990年

大きさ：長さ10.1cm・厚さ0.7cm、重量98.1g

展示位置：第2室「木器をつくる」

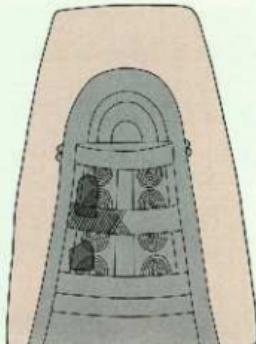
工具や農具の石器から鉄器への変化は、木工や耕作の効率を飛躍的に高め、技術史上、大きな画期とされています。石器から鉄器への移行は、おおよそ弥生時代に始まりますが、地域によってその時期はまちまちです。ここでは、唐古・鍵遺跡の弥生時代末期の鉄斧からその状況を考えます。

弥生時代の鉄斧には、柄に装着する部分がソケット状になる「袋状鉄斧」と、斧の平面が長方形の板状になった「板状鉄斧」の2つのタイプがあります。唐古・鍵遺跡の鉄斧は、全面が鋸びで覆われていますが、後者にあたり、瀬戸内以東で独自に作られたタイプです。また、斧には伐採用の「縦斧」と加工用の「横斧」があり、大型の鉄斧が「縦斧」に、小型の鉄斧が「横斧」に対応すると言われています。今回の資料は大型品と小型品の中間にあたりますが、横斧と考えて良いでしょう。ところで日本列島では、北部九州を中心として鉄器

の使用が始まりました。当初は朝鮮半島からの輸入品や、これをリサイクルした再加工品がほとんどですが、弥生時代中頃には輸入した鉄素材を加工して鉄器の生産が開始します。また、弥生時代の後半には、瀬戸内以東にも鉄器が徐々に普及しましたが、その出土量が少なく、北部九州との間に大きな格差がみられます。

唐古・鍵遺跡の状況も同様で、鉄斧のほかヤリガンナなどほんの数点の鉄器が出土しているのみで、石器と比較するとほとんど皆無にちかい状況です。しかし、鉄器の実物は無くても出土した木製品の加工痕から鉄器の存在を裏付ける研究がなされており、唐古・鍵遺跡の木製品にも鉄器による加工痕が残っています。

このように近畿での鉄器の評価は意見が分かれるところであります。唐古・鍵遺跡の鉄斧もその一端を担っています。



推定される銅鐸鋳型

No. 40  
重弧文様をもつ  
袈裟襷文銅鐸鋳型

唐古・鍵産の銅鐸はいすこに

◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第3・65次調査

発見年：1982年・1997年

大きさ（上の鋳型）：高さ9.8cm・幅8.1cm・

厚さ5.8mm

展示位置：第2室「青銅器をつくる」

弥生時代最大の謎の一つに銅鐸があります。西日本を中心に500個前後の銅鐸が出土していますが、その製作地が判明している遺跡は、ごくわずかです。なかでも唐古・鍵遺跡は、大量に銅鐸を製作していた遺跡として有名です。

今回の銅鐸鋳型は、凝灰岩製で2つのかけらが残っていました。この凝灰岩は、奈良盆地東部（奈良市春日山付近）で採集できる石材が最も類似していると推定されています。凝灰岩は、やや黄色味を帯びた灰白色を呈し比較的軟らかいものです。耐火性やガス抜き、大きさや細工などの点から鋳型に適している石材を見つけ出すのは至難のことだと思われ、弥生の鋳物師も苦労したことでしょう。

さて、この2つの鋳型片はいずれも8cmほどの小片で砥石に転用されていました。鋳型が壊れた後、砥石として使われましたが、幸いにも黒く変色した鋳型の面が残っていました。

この鋳型片の観察から、高さ40～50cmの四区袈裟襷文銅鐸（斜格文を充填した縦横の帯によって4つの区画を作った文様）で四区の内部に上下の重弧文（円弧を重ねた文様）を配する特異な銅鐸の鋳型であることが判明しました（右図）。残念ながら、現在のところ、この鋳型で铸造された銅鐸は見つかっていません。

石の鋳型では複数の銅鐸が铸造でき、現在、5～6個の兄弟銅鐸が確認されていることから、唐古・鍵遺跡のこの鋳型でも5個程度の銅鐸が製作された可能性があります。いずれ唐古・鍵産の銅鐸も日本のどこかで発見されることでしょう。

唐古・鍵産の銅鐸の輝きと音色をどこの地域の人が見て聞き、何を感じていたのか、想像は膨らみます。このような小さな石製鋳型ですが、唐古・鍵遺跡と他の地域との関係を考える上では最も重要な遺物になるものです。



銅鐸片の推定位置

No.41

## スクラップにされた銅鐸片

唐古・鍵産の銅鐸は  
絵画のある四区製後櫛文銅鐸

### ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第77次調査

発見年：2000年

大きさ：高さ7.2cm・幅6.0cm・厚さ0.9cm

展示位置：第2室「青銅器をつくる」

弥生時代の祭器の一つ、銅鐸。これがどのように使われ、埋納されたかは、弥生時代の謎です。大半の銅鐸は、完全な形で埋納されていますが、破碎されたり、装身具として再加工されたりした銅鐸片もいくつか知られています。銅鐸がどのように最後を迎えたかを知ることは、謎を解く一つの鍵になるでしょう。

今回紹介する銅鐸は、唐古・鍵遺跡第77次調査で出土したもので、完全な形ではなく  $6 \times 7\text{ cm}$  ほどの小さなかけらです。銅鐸は、吊り下げる部分の「鍾」と内側から叩いて音を共鳴させる本体部分「身」、「身」の側辺の装飾部分「鰐」で構成されています。

今回の銅鐸片は、渦曲や文様から「身」の中央やや下側の破片で、外側に斜格文を充填した横帯と縦帯がある四区製後櫛文銅鐸と判断されます（写真右）。復元すれば高さ40cm以上の大きさになります。また、この区画内には、 $0.5 \times 0.6\text{ cm}$  の横長の梢円形の突線（C）が一部残っており、意匠不明の絵画と考えられます。

この銅鐸片の最大の特徴は、厚みが約0.9cmもあることです。一般的に銅鐸の厚みは0.3cmほどですから、この銅鐸片は厚すぎます。また、銅鐸片の下辺は割れ面でなく、熔けた青銅がそのまま固まり丸くなった状態を示しています。このことから、銅鐸の鋳造方法は銅鐸を逆さにした状態に鋳型を置いて青銅（湯）を注いだことがわかります。また、厚みがあることや掘まで完成していないことから、鋳造に失敗しスクラップにされた可能性が高いでしょう。この破片の出土地が青銅器鋳造の工房区であることからも、もう一度鋳直おすすめに原料として蓄えていたと考えられます。この銅鐸を鋳造した鋳型は、まだ青銅器工房から見つかっていないませんが、唐古・鍵遺跡で製作された銅鐸の一つが絵画を有する中段階の製後櫛文銅鐸であることは確実です。

このように鋳潰される前の銅鐸片から、鋳造方法や原料の管理のしかたが明らかになります。

## Tomoe-gata Dōki

Bronze Implement Imitated by Shell Ornament



巴形銅器片（左）とその復元品



沖縄採集のスイジ貝

No.42  
スイジ貝を模した  
巴形銅器

貝に秘められた鉤の呪力

今回、国内で独自に作り出された巴形銅器を紹介します。巴形銅器とは、全国で100点以上出土している弥生時代から古墳時代にかけてみられる飾り金具の一つです。

唐古・鍵遺跡から出土したものは約1/10の小片ですが、復元すると、半球状の体部に左捩じりの扁平な七本の鉤状突起が放射状に取り付く形になります。また、半球形の裏側は残っていませんが、棒あるいは瘤状の把手が付けられている例があり、紐を通して装着できるようにしているようです。

このような巴形銅器は、時代によって形態が違います。弥生時代のものは、半球形あるいは円錐形の頂部を平らにした形の体部に左捩じりの5~8脚がつくもの、古墳時代のものは円錐形の体部に右捩じりの幅広の4脚のものが多いようです。このことから、唐古・鍵遺跡のものは弥生時代の所産とわかります。

古墳時代のものは、大阪府和泉黄金塚古墳で巴形銅

## ◆コレクション・データ◆

時代：弥生時代 後期

調査：唐古・鍵遺跡 第23次調査

発見年：1985年

大きさ：（左・実物）残存長2.7cm

（右・復元品）復元径10.3cm・

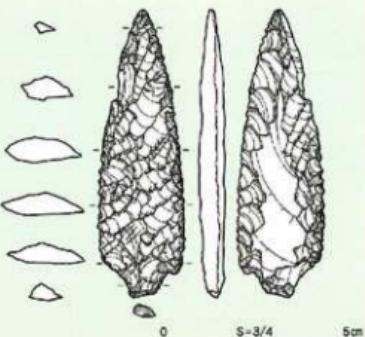
復元高1.9cm

展示位置：第2室「青銅器をつくる」

器を装着した革盾が出土し、その使用方法がわかりました。ただし、弥生時代のものは、豪奢に副葬される例や一括埋納される例などがあり具体的な使用法は不明です。

巴形銅器は、弥生時代後期の北部九州で製作が始まった青銅器で、古墳時代には朝鮮半島にもみられます。北部九州では、沖縄など西南諸島で産出する貝類を腕輪とする風習がみられ、巴形銅器も西南諸島に生息するスイジ（水字）貝（写真右）をモデルにしたとする説があります。スイジ貝の突起（鉤）には、魔除けの効果が想定され、呪力を秘めた貝として神聖視されたのでしょう。その形を模倣した青銅製品もまた、呪力をもっていたでしょう。

このように弥生時代の人々は、神祕的な貝の形を、青銅製に写すときには装饰的なデザインにしましたが、その背景には当時の想いや信仰が隠されているのです。



尖頭器の実測図

No.43

## 多採集の有茎尖頭器

奈良盆地の低地部に進出を示す事例

### ◆コレクション・データ◆

時代：縄文時代 草創期

採集地：多遺跡

発見年：1972年

大きさ：残存長7.8cm・重さ14.1g

展示位置：第3章「田原本のあゆみ」

（参考）奈良盆地の有茎尖頭器

今回紹介する有茎尖頭器は、飛鳥川の改修工事の際に、多宮橋の北約100mの地点で谷昭男氏によって採集された資料です。この地点は、弥生集落として知られる多遺跡の範囲内に位置します。

有茎尖頭器とは、先端が尖った打製石器のうち基部に茎を作り出したもので、有舌尖頭器とも呼ばれます。二上山産のサヌカイトを原石とし、鹿角の先端を押し当てて、石を潰すように形を整えています。

大小さまざまなタイプがみられ、大型の一群を槍の先に付ける石槍、小型の一群を矢の先に付ける石箭とする意見もありますが、その使い方を明確に分けることは難しいようです。ただし、今回紹介する有茎尖頭器は、先端が衝撃で欠けており、狩猟具として使われた可能性があります。

ところで有茎尖頭器は、旧石器時代の終わりから縄文時代の始めごろ（草創期）に、日本全国に出現しま

す。このころは、氷河期が終わり温暖化する時期にあたります。有茎尖頭器は狩猟の対象となる動物が変化するなかで、新たに開拓された道具といえます。

これまで奈良盆地では、約70点の有茎尖頭器が知られていますが、ほとんどが県東部の山間部や、盆地周縁の高所から出土しています。これは、縄文時代遺跡の分布の傾向と一致し、盆地の低地部への遺跡の本格的な展開は、縄文時代後期以降です。

こうしたなか、盆地のほぼ中央で有茎尖頭器が出土することは珍しく、低地への人類の進出を考えるうえで貴重な資料です。また、同様の例は、宮古北遺跡でもみられます。いずれの資料も単発的で生活の跡は不明瞭です。

低地で出土する有茎尖頭器は、あるいは水辺まで狩猟に来た人たちの落し物かもしれません。その性格に関しては今後の検討課題です。

## Jōmon Fukabachi-gata Doki

Jomon Pottery without Decoration

保津・宮古遺跡の縄文土器と石器  
(保津・宮古遺跡 第14・20次調査)

No.44

## 粗製縄文土器は語る

奈良盆地における稻作導入前夜

## ◆コレクション・データ◆

時代：縄文時代 後期

調査：秦庄遺跡 第1次調査

所蔵者：奈良県立橿原考古学研究所

発見年：1991年

大きさ：復元口縁径34.7cm・復元高40.0cm

展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

奈良盆地の低地部では、農耕が始まった弥生時代以降の遺跡は多く見つかっていますが、それ以前の縄文遺跡は少なく不明な点が多くあります。田原本町内では、縄文時代後期の土器が出土した遺跡として、秦庄遺跡や保津・宮古遺跡（写真右）があります。

今回紹介する土器は、秦庄遺跡から出土した縄文土器で深鉢と呼ばれるものです。小さな底部に砲弾形を呈した胴部が作られています。土器の外表面は、貝殻で表面を撫でつけた「貝殻余痕」と呼ばれる手法が用いられており、文様をもたないシンプルなものです。

縄文土器は、後期になると文様をもつ精製土器と文様のない粗製土器が出現し、マツリの場で使う「ハレ」の土器と、日常的な「ケ」の土器に分化したとされています。秦庄遺跡出土の縄文土器は、後期中頃に位置づけられ、この時期の粗製土器になります。

縄文時代には木の実などが主食とされ、ドングリ類

の煮沸が深鉢の主要な用途と考えられています。とりわけ東日本では、トチやミズナラ・コナラなど灰汁の強いドングリが多く、ドングリの灰汁を抜く煮沸具として上器が多用されました。

こうしたなか、縄文時代後期には気候が徐々に寒冷化し、西日本でもトチの利用が増加します。これに伴って、ドングリの灰汁抜き技術も西日本に伝わり、実用的な粗製土器が作られたのでしょうか。縄文時代後期以降、奈良盆地の低地部でも徐々に遺跡が増加します。これは水辺に生育するトチを獲得するためと考えられ、環境と植生の変化が遺跡の立地にも大きな影響を与えたのでしょうか。

低地部での生活の開始は、新たな環境への適応を促し、弥生時代における稻作の導入を準備したとも考えられます。



腰に付けられた縄

No. 45

## 馬を曳く人物埴輪

腰にさす縄が人物埴輪の性格を示す

### ◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代 後期

調査： 笹鉢山古墳群 第1次調査（笹鉢山2号墳）

発見年：1994年

大きさ：高さ58.8cm

展示位置：第3室「埴輪の世界」

**人物埴輪**と言えば、**甲冑**を身にまとった武人埴輪をつい想像してしまいますが、他にもさまざまな性格の人物埴輪があります。今回紹介する資料は、「馬を曳く人物埴輪」です。

この埴輪は、円筒状の基台部に左手を挙げ、右手を下げた上半身を組み合わせたもので、脚部の表現が省略された作りをしています。頭部は、後頭部の1/3程度しか残っていませんが、やや角張った作りで頭頂部は塞がれずに大きく空いています。髪は、左右と後ろに束ねた角髪で男子であることがわかります。顔面は失われていることから、その表情や入れ墨の有無はわかりません。衣服は簡素で、裾がスカート状に開き、腰帶のみが凸帯状に表現されています。なかでも注目されるのは、背中側の腰帯に縄とみられるし字形の粘土紐を貼りついていることです。（写真右）

この左手を挙げたポーズは手綱を引く姿、腰の縄は馬の飼となる馬草を刈るためのものと考えることができます。

また、この埴輪が出土した笹鉢山2号墳の同じ場所から馬形埴輪も出土しており、「馬曳き」の可能性を高めています。

ところで、日本には野生の馬は生息せず、古墳時代の中頃（5世紀）に、乗馬の風習とともに朝鮮半島から伝えられました。『日本書記』には、淀川流域や東国に馬を飼育する「牧」が置かれたという記録があります。また、履中天皇の条では、「豊臣」をもつ河内馬飼部が天皇の淡路鳩幸奉に際し、馬の手綱を執ったことも記載されています。

今回紹介した人物埴輪では、前述のとおり入れ墨の有無はわかりませんが、一緒に出土した同様の人物埴輪の顔には入れ墨があります。このことから入れ墨のなかには、馬を飼育する職掌などとの関係も考えられます。

このように小規模な円墳に並べられていた馬を曳く人物は、数多くある人物埴輪のなかでも、その性格を確認できる一級の資料となっています。

## Uma-gata Haniwa

Horse-Figurine Haniwa



粘土で表現された目金具

No.46

## 飾り馬の埴輪

馬形埴輪は「權威の象徴」、  
それとも「死者靈の乗り物」

## ◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代 後期

調査：笠鉢山古墳群 第1次調査（笠鉢山2号墳）

発見年：1994年

大きさ：高さ73.5cm・推定長85.5cm

展示位置：第3室「埴輪の世界」

古墳には、家形埴輪や人物埴輪のほか、さまざまな動物埴輪も並べられました。今回は馬を曳く人物埴輪と一緒に出土した馬形埴輪を紹介します。馬形埴輪は、5世紀後半から6世紀前半にかけて作られ、動物埴輪の中では最も多くみられる埴輪です。

馬は古墳時代の中頃に朝鮮半島から伝えられました。これに伴って古墳にも馬具が副葬されるようになります。このような馬具類は、用途の推定が困難なものもあり、馬の埴輪を参考にすることで装着方法がわかつたり、時間的な変化を比較検討することができたりします。

さて、この馬形埴輪は、西日本では例がないほど残り具合が良好な埴輪で、推定で復元しているところはほとんどありません。のことから、馬の形態や装備も大変よくわかる埴輪となっています。

この馬形埴輪のたてがみは整えられ頭部で束ね、また、尻尾も紐で巻き反り上がっています。蹄部分は一段太く作られ、蹄の後部は逆U字形に抉られており、写実的な表現です。また、馬を制御する轡や手綱、騎手が座る鞍や足を掛けける韁などの馬具、轡をとめる鏡板や面繋の目金具（写真右）、鉢を付けた杏葉などの装飾品も多く表現されています。大半の馬形埴輪はこのような「飾り馬」ですが、物資の運搬や農作業に利用されたと考えられる轡のみを装着した「裸馬」の埴輪もわずかにみられます。

このような「飾り馬」は、被葬者の「權威の象徴」としての側面もみられますが、「死者靈の乗り物」として古墳に並べられたという考え方もあります。古代以降、馬は家畜として犬とともに人と心の通じ合える、また、労働馬・軍馬として有益な動物になったのです。



牛の正面

No.47

## 百年以上前に 見つかった牛形埴輪

古代の牛の役割は？

### ◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代 後期

出土地：羽子田遺跡

発見年：1897年

大きさ：長さ74.4cm・復元高60.3cm

展示位置：第3室「埴輪の世界」

今回の牛形埴輪は、明治30（1897）年に羽子田遺跡、現在の田原本幼稚園の東隣接地にあたる場所から出土したものです。長らく東京帝室博物館に収蔵されていましたが、関東大震災を経て第2次世界大戦の折、奈良の帝室博物館（現・国立奈良博物館）へ疎開・移管された幸運な埴輪です。当時としては、全体の形がわかる牛形埴輪は例がなく、造形的に優れた埴輪であったため、昭和33年、国の重要文化財に指定されました。

この度の当ミュージアム開館に伴い、本館の目玉として町に返還してもらいました。現在でも牛形埴輪は全国で9例ほどしかなく、全体像のわかる資料として重要です。

この牛形埴輪は、大きな胴体に小さな頭部、肉付きの豊かな胸や背中、角の痕跡など写実的な作りで、牛の特徴をよく表しています。

このような牛形埴輪は、5世紀に遡るものもみられ

ますが、大半は6世紀前半ごろのものです。弥生時代にも牛馬骨の資料がありますが、疑問視する意見もあり、3世紀の「魏志倭人伝」の「牛馬無」の記述などから大勢としては、古墳時代中期以降に大陸から運ばれてきた動物と考えられています。

当初の牛の利用目的はよくわかりませんが、7世紀には草の出土や水田跡に残された牛の足跡が見つかっていることから水田耕作を目的として利用していたようです。牛耕の出現はその後の水稻農耕の効率を飛躍的に高めたと考えられ、農耕技術の革新を考えるうえでも注目されます。

また、飛鳥時代にはヨーグルトやチーズに当たる乳製品（酪・蘇と呼ばれる）の存在が知られていますが、このような乳製品や食肉についてはその後の歴史のなかでも不明な点が多く、家畜としての牛の研究は少ないのが現状で課題が山積です。

## Steaming Vessel



多数の孔があげられた底部

No.48

## 調理具の変革 甑

蒸し米の起源は？

## ◆コレクション・データ◆

時代：古墳時代 中期

調査：唐古・鍵遺跡 第59次調査

発見年：1995年

大きさ：高さ22.0cm・口径22.4cm

展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

現在の台所では、電気やガスを利用して調理することが普通ですが、今回は唐古・鍵遺跡出土の甑から調理の歴史を考えます。

この甑は、硬く焼き締まった須恵器で、バケツ形の腹部の両側に丸棒状の把手が付けられています。また、表面には縄目<sup>すじめ</sup>のタタキ文様が付けられています。この土器の特徴は、底部に径1cmほどの円孔が多数あけられていることで、容器としては使えないものです。そのため、この土器は、底にスダレなどを敷き、蒸し器にしたと考えられています。水を入れた甕<sup>おひつ</sup>の上に甑を置き、甕の水を煮沸<sup>しゆへつ</sup>することで、水蒸気が甑の孔を通して上昇し、甑の中身を蒸し上げます。

弥生時代には、菱形土器による煮沸が基本的な調理法とされており、甑で蒸すといった調理法は、古墳時代中期に本格的に普及しました。

古墳時代の甑は、朝鮮半島から伝えられ、渡来人の動向にも関連します。また、ほぼ同時期には須恵器や

カマドなどの新技術も朝鮮半島から導入され、日本列島の生活文化に大きな変化をもたらしました。

ところで日本では、現在でも米は煮沸（炊飯）する<sup>むかふ</sup>のが一般的です。一方、蒸し器による蒸米は、餅や強米<sup>ぱぱこり</sup>として利用され、さらに蒸米を発酵<sup>はつきょう</sup>させて酒や酢が作られます。これらは正月や祭りなどハレの日に利用され、神事と深く関連します。

蒸米の問題は、日本文化を考えるうえで重要な位置を占めますが、その出現時期をめぐっては、これまで不明とされています。古墳時代に登場した甑は、こうした問題を解決する手がかりとして注目されますが、実際に蒸米を調理したかは決め手を欠き、慎重な検討が必要です。

身近なお米の調理法に問しても、まだまだ未解決の問題が山積みですが、古墳時代における甑の出現が、当時の食生活に大きな影響を与えたことは確実でしょう。



井戸内に投棄された枡

No.49

## 平安時代の枡

支配者が管理する度量衡

## ◆コレクション・データ◆

時代：平安時代（12世紀後半）

調査：唐古・鍵遺跡 第26次調査

発見年：1987年

大きさ：幅18.4×18.8cm・高さ9.8cm

展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

度量衡（度は長さ、量は体積、衡は重さを表す）  
は、土地の管理や税金の徴収に関連し、これを計測する尺・橋・秤は、国家にとって重要な道具とされてきました。

今回は、古代の度量衡を知るうえで大変貴重な唐古・鍵遺跡の枡を紹介します。この枡は、ヒノキ製で1枚の底板と4枚の側板で構成されています。底板は長軸18.8cm、短軸16.3cmで、長軸側では底板の上に側板がのり、逆に短軸側では外側に付くことにより、正方形を呈することになります。また、側板の両端は凸部と凹部をつくり、互いに組み合わせ、側板・底板のいずれの固定にも木釘が用いられています。この枡は、外面の磨耗が著しく、縁辺は角がなくなり丸くなっています。特に注目されるのは側板上端の外側中央が、4枚とも磨耗していることです。紐状のものを十字に掛けていたのでしょうか。米などの計量に利用されていた可能性があります。

日本では、度量衡が奈良時代に導入され、大枡・小枡という2種類の枡が使われ、各地には様と呼ばれる基準の枡を配布し、その大きさは厳密に管理されたと言われています。奈良時代後期から平安時代には、各地に荘園が営まれ、私有地の開発が進みました。荘園領主や寺社勢力は、納税や寄進用には大きい枡を、充満しや給付には小さい枡を使って財を蓄え、国家による枡の統制は困難となりました。こうしたなか、11世紀には後三条天皇によって宣旨枡が、16世紀には豊臣秀吉により京枡が制定・統一され、その後の枡の基準となりました。

今回紹介した枡は、その容量が2200ccと京枡にちかく、度量衡の変遷を知るうえで重要な資料になります。枡が出土した地点は唐古池の東側堤防下で、周辺には古代から中世の荘園「田中庄」や「唐古東」氏の居館があったと考えられているところで、度量衡の意義とともに遺跡の性格も注目されます。



瓦  
三輪町  
口口

銘のある祠

No.50

## 民間信仰の瓦質祠

瓦質祠は町内瓦師の作品

### ◆コレクション・データ◆

時代：江戸時代（19世紀後半）

調査：阪手カハウト遺跡 第1次調査

発見年：1990年

大きさ：高さ35.6cm・幅37.6cm

展示位置：第3室「田原本のあゆみ」

奈良盆地中央部の「国中」では、「野神信仰」と呼ばれる民間信仰が各地にみられ、著名な鏡・今里の蛇巻きも、「野神信仰」の一種です。

今回は「野神信仰」の一端を知る資料として、瓦と類似した方法で焼かれた祠を取り上げます。この資料は、江戸時代に築かれた塚の上に祀られたもので、地元（阪手）では「クサガミ（瘡神）サン」と呼ばれていました。子どもに皮膚病である瘡ができると、泥団子をお供えして治療を祈願したと伝えられています。

祠の周辺からは、土師皿や花瓶・銅錢（寛永通宝・文久永寶）などが出土しており、祠の中で土師皿に灯明を燈し、花や賽銭を供えていたのでしょう。この塚に祀られた祠は9点以上にのぼり、「クサガミサン」への信仰が、長期間継続していたことをうかがわせます。

なお町内では、多・矢部・小阪・今里・藏堂でも祠がみられ、「八王子さん」と呼ばれています。「野

神信仰」の実態は、不明な点も多く「クサガミサン」との比較検討も課題でしょう。

ところで発見された祠には、「瓦ヤ 三輪町 口口口」という線刻を記したものがあり、製作者を示す資料として注目されます（写真右）。また、昨年建て替えがおこわれた津島神社でも、「三輪町 瓦屋 善四良 内富吉才工」という線刻をもつ瓦が見つかっており、いずれも田原本町内での三輪町にあった瓦屋で生産されたと考えられます。その他、法貴寺の蓮光寺や八尾の鏡作神社の瓦でも、「今里村瓦師 平七」や「堀内氏作」などの作者名や年号を記した瓦が知られ、江戸時代の瓦生産や流通を復元する手がかりになります。

田原本町内には、江戸時代の古瓦を葺く建物も多くあり、町の手工業生産の歴史を考える重要な情報が隠されています。建物の解体や建て替えによって瓦が廃棄されてしまうと「瓦礫」と呼ばれてしまいますが、こうした身近な資料にも歴史が埋もれているのです。



本書掲載の唐古・鮮遺跡出土品



### 本書掲載の田原本町内遺跡出土品